

英語文学教育における映像の活用

－カズオ・イシグロ『日の名残り』を例に

An Effective Utilization of Movies in Teaching Literature in English
－Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day* as an Example

二ノ宮靖史、二ノ宮寛子
Yasushi Ninomiya, Hiroko Ninomiya

目次

1. はじめに
2. カズオ・イシグロ『日の名残り』を用いた英語文学の授業
3. おわりに

1. はじめに

1.1 総論としての文学

本稿では、英語文学教育における映像の活用法を、カズオ・イシグロ著『日の名残り』を例にして検討していくが、その前に、いくつかの背景について論じていきたい。

まず、文学とは何かについて、一般的な観点から考えてみたい。このことは、文学をどのように位置付けるかということであり、文学を研究する上での視点を提示する役割を果たすだろう。

個人的な記憶ではあるけれども、かつては生徒・学生として、現在は研究者・教員として、それぞれの機会に文学作品を読んだり教材として取り扱ったりすることはこれまで幾度となくあったが、文学とは何かという問いについて考える／考えさせられる機会がほとんどなかった。文学とは何かは顕在的には意識されないもの、あるいは暗黙の了解のように扱われているように推測する状況である。そこで改めて文学とは何かについて考えてみたい。

手がかりとなったのは、二つの国語辞典である。まず『広辞苑』第5版では、文学を「想像力の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品。すなわち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など」と定義している。また、『日本国語大辞典』第2版では、文学を「芸術体系の一様式で、言語を媒材にしたもの。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など。作者の、主として想像力によって構築した虚構の世界を通して作者自身の思考・感情などを表現し、人間の感情や情緒に訴える芸術作品。また、それを作り出すこと」と定義している。

これらを参考にして考えると、文学作品が作られるときに思考→作品という過程の中で想像力が思考を駆動し、言語形式が作品に実際の形を与えるというモデルを提示することが可能である。すると、文学作品が作られる過程で、想像力がかかわる部分と言語形式がかかわる部分を分けて考えることができる。その結果、背景としての思考・想像力と具現的な出力としての作品・言語形式という二つの部分を文学という体系の中の構成要素として捉えることが可能となる。

また、文学作品が読まれるとき、作品という言語形式が読み手によって認識され、認識された言語形式が展開され読み手の思考となり、思考の内容が思考を駆動させる要素である感情・情緒を刺激する場合には、作品→思考という過程が考えられるが、その場合にも具現的な入力としての作品・言語形式と、その入力によって引き起こされた結果としての思考という二つの部分を構成要素として捉えることができる¹⁾。

以上のモデル化は、文学の研究・教育において客観的な捉え方を可能にするだろう。一般的な意味での文学、個別言語によって下位分類された各国文学、あるいは詩歌・小説・戯曲・随筆・評論などそれぞれの形式のように、文学を駆動させる装置をモジュール化して捉えることができる。その結果、文学研究をより明快で論理的なものにすることができるだろう。

1.2 英語文学の位置付け

次に文学の下位分類である英語によって書かれた文学について考えてみたい。

英語による文学の名称には、イギリス文学、アメリカ文学などがあるが、本稿では、それらを包含した形で、英語文学という枠組みで英語によって書かれた文学を捉えることを試みる。これは、前節で述べた文学を駆動させるモジュールの一つである言語形式の具現形である英語を用いて記された文学という意味においてである。そうすることで、イギリス文学、アメリカ文学のみならず、アイルランド文学、オーストラリア文学等、英米以外の英語による文学をもカバーする上位概念を設定することができる。

英語文学の下位分類を設定する際には、研究の視点によって多様なパラメータを設けることが可能だろう。イギリス文学の場合には、古英語／中英語／近代英語のような英語の変化

¹⁾ 読み手の認識の仕方を考える場合、このようなモデル化を行なうことによって、文学作品が読まれる際に読み手の知識の多寡や認識の方法によって、正統的で適切な解釈が行なわれる場合があると同時に亜流・我流・妄執などの要素が存在し得ること、またそれらが文学論をより魅力的なものにする可能性があることをよりの確に捉えることができるだろう。

によって『ベオウルフ』／『カンタベリ物語』／『ジェイムズ王聖書』を比較・対照することが可能になるだろうし、齋藤(1963)が行なっているようにPuritanism／Classicism／Romanticismなどの時代思潮によって歴史を捉えることの説明にもなる。アメリカ文学の場合には、巽(2003)が行なっているようにピューリタニズム／リパブリカニズム／トランセンデンタリズム／ダーウィニズム／コスモポリタニズム／ポスト・アメリカニズムといった分類をすることも、方法論の一つであるということが明らかになるだろう。このように多様なパラメータの設定により、英語文学研究の理論的可能性が大きく広がり、英語という言語形式との相互関係によって、英語文学の枠組みを設定する基礎を形成するだろう。

1.3 英語文学教育の役割

次に学校で英語文学を教えることの役割について考察したい。

まず、前々節ならびに前節で述べた理論的枠組みを具現化すると、英語文学を教える際には次のような項目を設定することができる。

- (1) 作品中に用いられている英語の音声・語彙・文法・文体
- (2) 作品の内容
- (3) 作品の文学史的位置付け
- (4) 作品を鑑賞・研究する方法

以上の4項目をパラメータとして捉えると、教える対象や科目の性質によって、それぞれの項目をどの程度授業で取り扱うかを調整することができる。例えば、中学校であれば作品をより少ない語彙でリライトして(1)を調整、内容理解の練習問題を設けることで(2)と(4)の一部をカバー、(3)は省略することが可能である。高等学校であればリライトで用いる語彙の種類を中学校よりも増やす、(3)についても若干の説明を行なうことができるだろう。大学であれば作品をリライトなしで使用、専門科目であれば(3)と(4)に重点を置くというような調整ができる。

また、この枠組みにより既存の教材や授業事例を分析することがより容易で明確になる。例えば、上地他(2005: 88-101)では*Star Wars*を戯曲の題材として用い、練習問題として代名詞が指し示すものを問う問題、内容理解問題、役を演じる練習、語彙問題を設けている。これは戯曲という形式と内容に重点を置いたレッスンとして構成されており、当該作品の文学史的な位置付けや鑑賞の方法については明示されていない。他方、この教科書の解説編(Teacher's Manual)であるPower On English Reading編集委員会・東京書籍株式会社編集部

(2005: 162-179)では、題材選定のねらい、扱い方、*Star Wars*の作品概説が書かれている。このことにより、同じ題材でも生徒と教員では知っているべきことに違いがあることがわかる。

その他にも、ニュージーランドで出版されているstudy guideにおける文学の取り扱い方について考えてみたい。ニュージーランドには検定教科書の制度がなく、教材の選択に際しては各教員の自由度が高いが、生徒の自習用や教室での教科書としての使用を想定して、study guideが出版されている。例として9年生(日本の中学校3年生に相当)の英語のstudy guideであるHouston(1998)を見てみると、readingを取り扱った章には物語を読むための節がある²。そこには、具体的な作品名はほとんど書かれておらず、物語の種類や構成に重点が置かれている。これは、作品を鑑賞する方法に重点を置いた例として興味深い³。

1. 4 英語文学教育と映像

本章のおわりとして、英語文学教育における映像の活用について考えてみたい。

基本的に文学作品は文字によって著されている。文学作品を読む場合には文字を見ることによって内容を理解し、自らが既に知っている知識や想像力によって書かれていない背景を想像する。文学作品を読むことに慣れていない初学者を対象に英語文学を教える場合には、映像化された文学作品を活用することが有効であると考えられる。

映像化された文学作品では、登場人物が実際に動き、話す。服装や場所の様子が実際に見える。原作に書かれた内容が音声や視覚情報として、映像を視聴する者によって認識される。文字から読み取るよりも短時間にたくさんの情報を認識することができる。映像を活用することは、伝統的で古いと認識される可能性のある文学を、より興味を持たせ易く教える方法を提示する可能性を持っている。

2. カズオ・イシグロ『日の名残り』を用いた英語文学の授業

2. 1 概略

大学における英語文学の専門科目の授業を想定して作成した。教材には原作としてIshiguro(2005)を、映画版としてIvory(2009)を使用する。履修者はあらかじめ授業でカバーされる小説の箇所を読んでおくように指示されており、それをふまえて90分間の授業の中で4名程度のグループワークを中心に、映像を見たり音源を聞いたりしてワークシートを完成させながら学習していく形をとる。流れは以下のとおりである。

² Houston(1998: 57-64)

³ 学年が進むとPilott(2001: 207)やJohnson et al.(2001: 248)のように作品名のリストが掲載されている。

- 1) VocabularyとComprehension A&Bをグループで解答する。
- 2) 会話を音源で数回ずつ聞き、問題に答える。三つの会話のListeningと解答を繰り返す。
- 3) この回でカバーされた映画の箇所を3回視聴する。
- 4) ‘What do you think?’ の質問についてグループで討議する。
- 5) グループでの討議の結果をクラスに発表する。
- 6) 教員が文化的背景や言語表現などのレクチャーを行なう。

Vocabularyは予習の際にチェックしているであろう単語の定義を英語でも再度確認する目的で、*OALD(Oxford Advanced Learner's Dictionary)*の定義などを参考に出題している。日本語の意味だけを調べて準備している場合は反射的な意味の把握はできているが将来的に彼らが作成した英文に含んで使用することと結びつかないことが多いので、クラスでは原語の定義を使用して再確認させるようにしている。

Comprehension Aは選択肢を三つ設けた。ここで登場人物の人間関係や、会話の中での大きなポイントを確認させている。宿題で該当箇所を読んできているかどうかのチェックにもなる。

Comprehension Bは英語の質問に英語で答えさせる形式である。小説の箇所のより細かい質問に英文で答えさせることによって、予習の段階で深い内容理解を促進させる目的がある。

Listeningは時系列に沿ってA “William”、B “Disagreement”、C “At Servants’ Dinner Table”と名付けた三つに分けた⁴。それぞれ1分弱の長さなので、リスニングで繰り返し再生する際にもテンポよく行なうことができる。この回ではAは執事である主人公の父親の名前の呼び方をめぐる女中頭との会話である。それを使って五つの単語の穴埋めを行なった。Bではその二人の意見の相違を言語学的に分析させる。Cでは館の使用人達の食卓での会話の中に出てくるユーモアや教訓について英問英答を行なう。多角的なリスニングのタスクを行なうことで、聞き取る力だけでなく、聞き取ったことを分析し理解する力を養うことを目指した。

“What do you think?” は学習者自身の意見を聞き合い話す項目である。この回では、大きな論点であった執事の父親の呼び方について学習者の意見を問い、また言い争っていた二人の登場人物についてその後の展開を予想させる二つの問題を設定した。1問目は日英の職場

⁴ AとBは原作とほとんど同じセリフのシーンである。Cは原作では主人公が父を回想する場面であり、伝聞形式で書かれている。原作に近い表現のシーンは映像と併用しやすいが、伝聞形式の箇所をどのようにセリフにしているかを比較することも興味深い作業であると思われる。

や社会でのルールを比較させることで文学作品から実際の社会に視点を広げることができる。2問目はこの登場人物二人が出会った初期の場面なので、文学作品を楽しむ読者として、この二人の関係の今後の展開について想像させることができる。また、この項目を利用してグループでディスカッションを行ない、その結果をクラスに発表することで、他の意見を聞き、まとめる力、そして効果的に発信する力を養う。

2.2 作者

カズオ・イシグロは日系イギリス人である。1954年に長崎県で生まれ、海洋学者である父の仕事の関係で、5歳で英国に移住した。母国語は英語である。ケント大学で英文学、イースト・アングリア大学大学院で創作を学び、1982年の長編デビュー作*A Pale View of Hills*で王立文学協会賞、1986年に発表した*An Artist of the Floating World*でウィットブレッド賞を受賞した。1989年に発表した長編3作目となった本稿で取り扱う作品*The Remains of the Day*でブッカー賞を受賞。その後も次々と世界的ベストセラー作品を発表している。

2.3 ストーリー

スティーブンスは永年ダーリントン・ホールに仕えている執事である。アメリカ人に持ち主が変わってからスタッフ不足が続き、悩んでいた。主人に、休暇を取り車で国内を旅するように勧められたことと、以前密かに心を寄せていた女中頭のミス・ケントンがダーリントン・ホールに戻りたい旨の手紙を遺したのをきっかけに、彼は旅に出ることにした。前のイギリス人の主人の下での、館で起きる国際政治に関与する出来事、元執事であった父の老いと死、ミス・ケントンとの関わりを思い起こしつつイギリス西部を車で旅し、終わりにミス・ケントンと20数年ぶりの再会を果たすという話である。

2.4 英語文学の中での位置付け

この作品はイギリスで書かれた文学であるが、作者は英国籍の日本人で英語が母国語である。また、作者は大学で創作を学んでいる。この作品は1989年に発表され、1956年を舞台に1920年代からの出来事を回想している。

2.5 注目すべきポイント

「執事」というイギリス的な職業を持つ主人公が、休暇中にイギリスの美しい田園地帯を旅しながら華やかな館での表舞台の出来事を回想していく。作品で使用されている言語表現は当時の社会のものに忠実であるが難解ではない。貴族に仕える人々がさまざまな階級の相

9. be indebted to ~

10. to perfect

- a. a servant who works under somebody
- b. a thing that takes your attention away from what you are doing
- c. a male servant who assists a butler
- d. to use a particular name or title for somebody when you speak to them
- e. the main male servant of a large house
- f. to make something perfect or as good as you can
- g. to recognize the difference between two people or things
- h. grateful to somebody helping you
- i. not good at noticing things around you
- j. (in Western countries) a name given to somebody when they are born or when they are christened; a personal name, not a family name

<Comprehension A>

1. Match the name of characters and their professions.

Miss Kenton

Mr Stevens

Mr Stevens senior

- a. butler b. under-butler c. housekeeper

2. Complete the sentence by choosing the best answer.

Miss Kenton entered Mr Stevens' pantry (office) because she wanted to

- a. discuss what to do with Mr Stevens' father.
- b. brighten his pantry with flowers.
- c. ask some questions about her new job.

3. Complete the sentence by choosing the best answer.

Mr Stevens asked Miss Kenton to

- a. address his father by his full title.
- b. work much harder to impress him.
- c. bring some flowers to his pantry.

C. At Servants' Dinner Table

Listen to the conversation, and answer the following questions⁶.

1. Why does Charles give compliments to Cook?
2. Why does Mr Stevens correct Charles' grammatical mistake?
3. What is the lesson the servants learn from Mr Stevens Sr.'s story?

<What do you think?>

Answer the questions below based on your opinion.

1. Which opinion, Mr Stevens' or Miss Kenton's, do you think is right about the addressing of Mr Stevens' father? And why?
2. The scenes you have read and watched are the beginning of the encounter of Mr Stevens and Miss Kenton. What do you think their relationship would become in the later scenes?

<Answer Keys>

Vocabulary

1. b 2. g 3. j 4. e 5. c 6. a 7. i 8. d 9. h 10. f

Comprehension A

1. Miss Kenton (c) Mr Stevens (a) Mr Stevens senior (b) 2. b 3. a

Comprehension B

1. Because she thinks that flowers make his dark pantry lively.
2. Miss Kenton calls his father by his Christian name. Mr Stevens thinks that his father is a respectable person to be called by his full title.
3. She does not understand fully about his idea, but she follows his advice.

。この問題で用いられる会話については、本稿末の付録を参照されたい。

Listening

A 1. matter 2. calling 3. take 4. distinguish 5. grateful

B 1. I don't quite understand what you're getting at, Mr Stevens.

2. **Mr Stevens** [Miss Kenton should call my father as Mr Stevens Sr., because he is a very respectable person. It is a mistake for a young lady to call an elderly and respectable person by his Christian name even though her present career is higher than that of my father. She can learn a lot from him.]

Miss Kenton [It is natural to call William as 'William' regardless of his age and experience because he is my under-servant now.]

3. If you'll please excuse me.

C 1. Because his noble guests give compliments to Cook. He mimics their habits humorously.

2. Because he thinks that potential butlers have to speak perfectly.

3. They can learn that great butlers have to have dignity.

What do you think?

1. (Students' opinion)

2. (Students' opinion)

3. おわりに

本稿では、総論としての文学を原論的な観点から考察するとともに、イギリス文学・アメリカ文学を包含した形での英語文学という理論的枠組みを設定することにより、文学の下位分類としての英語文学研究の可能性について考えることができた。また、英語文学教育の役割と英語文学教育における映像の活用について考察し、英語文学を教える方法の例としてカズオ・イシグロ著『日の名残り』を題材にした授業案を提示することができた。本稿を英語文学教育の方法論を構築するきっかけとしていきたい。

参考文献

- Hornby, A.S. (2010) *Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th ed.* Oxford University Press
- Houston, M. E. (1998) *Year 9 English Study Guide.* ESA Publications
- Ivory, James (2009) *The Remains of the Day.* Sony Pictures Entertainment
- イシグロ, カズオ著, 土屋正雄訳 (2001) 『日の名残り』 早川書房
- Ishiguro, K. (2005) *The Remains of the Day.* CPI Bookmarque.
- Johnson, J., et al. (2001) *Year 12 English Study Guide.* ESA Publications
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典』
第2版 小学館
- Pilott, M. (2001) *Year 11 English Study Guide.* ESA Publications
- Power On English Reading 編集委員会・東京書籍株式会社編集部(2005) 『Power On English
Reading Teacher's Manual(解説編)』 東京書籍
- 齋藤勇 (1963) 『英文学史概説』 研究社
- 新村出編 (1998) 『広辞苑』 第5版 岩波書店
- 巽孝之 (2003) 『アメリカ文学史—駆動する物語の時空間』 慶應義塾大学出版会
- 上地安貞他編 (2005) *Power On English Reading* 東京書籍

付録

<Listening B: Disagreement>

14' 46" ~16' 45"

K: Excuse me, Mr Stevens.

S: Yes, Miss Kenton.

K: I don't quite understand what you're getting at, Mr Stevens. I am a housekeeper in this house, and your father is the under-butler, in other hand, I am accustomed to addressing under-servants by their Christian names,...

S: If you would stop to think for a moment, you would realize that how inappropriate it is for one such as yourself to address as William someone as my father.

K: But I'm sure it must have been very galling for your father to be called William by one such as myself.

S: Miss Kenton, all I am saying is that my father is a person from whom if you wish to be more observant, you may learn many things.

K: I'm grateful for your advice, but do please tell me what marverous things might I learn from him?

S: I might point out that you're still unsure of what goes where and which item is which.

K: I'm sure Mr Stevens Sr. is very good at his job, but I can assure you, Mr Stevens, that I am very good at mine.

S: Of course.

K: Thank you. And I, if you'll please excuse me.

S: Oh, well.

<Listening C: At Servants' Dinner Table>

16' 46" ~19' 19"

Charles(C): My compliments to Cook, if you would. What a lovely piece of crackling.

S: I'm sure you said something witty. Share with the rest of us, who weren't fortunate enough to hear you.

C: I said the sprouts is done the way I like them. Crisp-like, not mushy.

S: Sprouts "are" done, not "is" done. Isn't right, George?

George: Yes, Mr Stevens.

S: Forgive the correction, Charles, as I would have done. At your age for the sake of my education. Because I'm sure even you have ambitions to rise in your profession.

C: Oh, yes. I'd like to be a butler, to be called Mister, not Charlie, and sit in my own pantry by my own fire, smoking my cigar.

S: I wonder if you realize what it takes to be a great butler?

Mr Stevens Sr.(Sr): Takes dignity, that's what it takes.

S: Thank you, Mr Stevens. Dignity, that's right. Dignity. The definition from our quarterly "The Gentlemen's Gentlemen": A great butler must be possessed of dignity...

Sr: In keeping with his position. There was this English butler in India. One day, he goes in the dining room, and what's he see under the table? A tiger. Not turning a hair, he goes straight to the drawing room. "Excuse me, my lord," and whispering, so as not to upset the ladies. "I'm sorry. There appears to be a tiger in the dining room. Perhaps His Lordship will permit use of the twelve-bores?" They go on drinking their tea. And then, there's three gunshots. They don't think nothing of it. In India, they're used to anything. When the butler is back to refresh the teapots, he says, cool as a cucumber: "Dinner will be served at the usual time, my lord. And I am pleased to say there will be no discernible traces left of the recent occurrence by that time." (laughter) I'll repeat it. "There will be no discernible traces left of the recent occurrence by that time."

S: Wonderful story, Mr Stevens.

Sr: Thank you, Mr Stevens.

S: Wonderful story. That's the ideal that we should all aim for. Dignity.